

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：松本 剛次 作成日：2026年1月27日

1. 教育の責任

日本語・日本語教育担当の教員として、日本語教員養成課程内の授業に加え、留学生への日本語教育を担当している。加えて「キャリアデザインⅢ・Ⅳ」の担当教師として、2年生への教育も担当している。また、短期大学の留学生日本語コースのコーディネーターとして、日本語の授業全体のコースデザインも担当するとともに、通信教育課程の日本語教員養成課程のコーディネーターも担当し、スクーリング科目の「教育実習」と通信科目の「日本語教育」「社会言語学」及び卒業論文指導を担当している。

2025年度の担当授業は以下のとおりである（通学課程のみを記す）。

<春学期>

「キャリアデザインⅢ」「日本語教育における言語と心理」「多文化社会コミュニケーション論」「日本語総合 A I」「日本語作文（上級） I」「日本語総合演習 I B（短期大学授業）」

<秋学期>

「キャリアデザインⅣ」「外国人に教える日本語」「社会言語学概論」「日本語総合 A II」「日本語作文（上級） II」「日本文化・アジア文化研究（オムニバス）」「日本語総合演習 II A（短期大学授業）」

2. 教育の理念

大手前大学のディプロマ・ポリシー及びディプロマポイントに賛同し、学生の以下の能力の向上につながる授業を心掛けている。

① Knowing（知識とリテラシー）

1. 教養と専門知識
2. 知識・情報を活用する力

② Doing（実践力）

1. 国際感覚
2. 協働的問題解決力
 - (1) 対人基礎力
 - (2) 対自己基礎力
 - (3) 対課題基礎力

③ Being（信念と志）

1. 豊かな人間性と肯定的自己概念
2. 社会的責任

日本語・日本語教育担当の教員として、学生の当該分野の知識と技能を伸ばすことと上記の能力を伸ばすことは両立できると考えている。なぜなら、日本語教育という分野自体がまさに日本語という日本語母語話者以外の者にとっては外国語、第二言語を使用し、人とコミュニケーションを行い、社会的責任も伴ったうえで、学ぶ側も教える側も自分自身を成長させていくという、上記の能力すべてが必要な分野だからである。

3. 教育の方法

授業科目によりやり方、教え方は様々なので一概には言えないが、講義科目であっても、受身型ではない、参加型の授業を心掛けている。具体的には、「日本語教育における言語と心理」「多文化社会コミュニケーション論」では、グループ・ディスカッションを積極的に取り入れ、「外国人に教える日本語」ではワークシートを用いた日本語の文型分析や初級日本語授業のデザインづくりの活動を行い、「社会言語学概論」ではel-Campusのディスカッション機能を活用し、講義中にメモを書かせ、それをel-campusにアップし、クラス全体で読み合い確認するといった活動を取り入れている。また、「日本語総合 A I、A II」「日本語総合演習 I B、2 A」「日本語上級作文 I」といった留学生対象の日本語の授業においても、ニュースビデオを見せた上でそのテーマについて議論し、レポートやスピーチにまとめるといった単なる日本語の授業に終わらない、日本語を使って物事をより深く考えるという活動を行っている。

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：松本 剛次 作成日：2026年1月27日

なお、すべての授業において、授業で使ったパワーポイントや資料は毎回、el-Campus にアップし、学生が後から見直すことができるようにしている。課題や教室活動で使用したワークシートなども、すべて el-Campus を通してダウンロード、アップロードするようにしている。

4. 教育の成果

授業評価アンケートの結果を見る限り、担当している日本語教員養成課程関連科目についての学生からの評価はそれなりに高いと言える。授業見学していただいた同僚教員からの評価もそれなりに高い。将来の進路として日本語教師を考えるようになった学生も出てきている。留学生に対する日本語科目については「日本語上級作文 I」についてはレポートの書き方を十分に学んでいないまま本学に編入してきた学生が、それなりのレポートを書けるようになった。また短大の「日本語総合演習 I B、II A」においては目標としている n 日本語能力まで引き上げることができた。今年度の学生ではないが、3年前に担当した学生は現在学部の3年生へと編入しているが、日本語力としては一段劣るところからのスタートであったにもかかわらず、今では、当初から大学に入学した留学生よりもむしろ高いレベルの日本語力に到達した学生もいる。通信教育課程で担当している教師研修においては、短期間のスクーリングでありながらもプロとして現場に出ているレベルにまで持っていくことができている。また指導している卒業論文にも質の高いものが見られる。

なお、通信教育課程においては日本語教員養成課程のコーディネーターとして文科省による登録実践機関及び登録日本語教員養成機関の認定に力を入れた。結果通信教育課程としては初めての、現時点では唯一の認定を得ることができた。

5. 改善への努力と今後の目標

来年度は新たに2年生で日本語必修科目である「応用日本語」というものが始まる。この授業は単なる日本語の授業としてではなく、日本語を通して考える力、そしてそれを表現する力を養うことを主な目的としている。まさに本学のディプロマ・ポリシー及びディプロマポイントを、どう日本語の授業に落とし込むかの恰好の場であると考えている。

また、通信教育課程では、目標であった文科省の認定は得られたので、今後は新たな授業を追加し、現在唱えられている「日本語教育の参照枠」の感が方に基づいた、新しい時代の日本語教育を進めていきたい。5月にはシンポジウムの開催も決定している。内外にアピールする良いチャンスである。

【添付資料】

なし